

リスニング教育について

——ドイツで出版された2冊のドイツ語教科書の分析と比較——

Roland Schulz

0. はじめに

ネイティブスピーカーの日常のコミュニケーションに用いられる4つの技能の中で、実は「聞く」の割合が約45%で第一位を占めおり非常に重要な技能である (Brintzer 2016:24)。一方で外国語教育においては「聞く」ことが難しいというイメージがある。例えば「読む」、「書く」と「話す」の場合では学習者は自分でスピードをコントロールすることができるが、「聞く」の場合では聞いた一つ前の文に戻ることはできないし、スピードのコントロールも自分ではできない。Buckによると、ネイティブスピーカーは一秒で平均単語3語を話すためかなり早く、学習者の脳内の聴き取りプロセスが自動的に働かないとリスニングの内容に追いつくことができない (Buck 2001:7)。

どういふことかといえば、スピードなどのコントロールができないので、CDで外国語の会話を聞く時に様々な過程が脳内で同時に行われないういけないのである。聞いた内容の要点をつかんで、情報を圧縮してそれらを記憶しなければならないし、同時にCDの会話の続きに関する予想や推測をしながら、その予想や推測が合っているかどうかという判断もしなければならない (Buck 2001:7)。リスニングの際に、その様々な過程が自動的に行われるように相応しいリスニングの教材を通じてリスニングのストラテジーを身につけることが重要である (Gehring 2018:95)。

本論ではドイツで出版された最新のドイツ語のリスニング教科書二冊を分析して比較する。一つは Hueber 出版社の『*Zwischendurch mal ... Hören. Deutsch als Fremdsprache. Niveau A1-A2.*』(2016年)で、もう一つは Klett 出版社の『*Hören und Sprechen A1. Das Training.*』(2018年)である。いずれも初級ドイツ語のリスニング教科書で、ドイツに留学中の大学生または社会人を対象として構成されたものであり、どちらの出版社も外国語の教科書、またはドイツ語を外国語として教えるための教科書に関して最もよく知られている。

1. リスニングの特徴と指導のポイント

この章ではまずはリスニングストラテジーの発展やドイツ語圏¹のリスニングストラテジー(リスニングの目的)を説明する。次にリスニングの予習と復習のポイントやリスニングテキストの種類も紹介した上で、二つの教科書の分析カテゴリー表の構成を行う。

¹ ドイツ、オーストラリア、(フランス語とイタリア語を母語にする州を除いた) スイスとリヒテンシュタイン

1.1 リスニングストラテジーの発展について

リスニングの際にいつもすべての単語一つずつに焦点を当てすぎ、リスニングに失敗する学習者が非常に多い (Krashen 1983:75)。その失敗の理由は、すべての単語の意味を理解していないと内容が全体的に分かれないと学習者が考えているためであり、それは偏った考え方 (bottom-up) である (Buck 2001:4)。大切なのは、リスニングの際に重要な部分とそうでない部分とを区別する能力を身につけることである。重要でない部分への集中力を減らし、重要な部分に来るまで待つ能力を持つことがリスニングの上達には必須となるのである。そういう集中のタイミングの意味を意識していない学習者は、未知の単語の数に圧倒されてリスニングに失敗する (Flowerdew 2005:70)。リスニング内容の全ての単語を理解する必要はなく、主立った情報 (リスニングの設問に応じた内容のポイント) だけに気を払えば十分なのである (Krashen 1983:75)。つまりリスニングの際に分からない単語や表現があっても、重要なポイントさえ聞き取ることができれば大まかな内容をつかむことは可能であるということなのである (Krashen 1983:75)。

Buck と Flowerdew によって、リスニングの理解のためには、上記の「bottom-up」より「top-down」のリスニング過程のほうが役に立つことが示された (Buck 2001:3; Flowerdew 2005:70)。「bottom-up」では学習者は、音声インプットの各語彙、句、節、文へと積み上げて意味を解析、構築するというリスニングテクニックを利用する。「top-down」では学習者はまず聞こえてくる音声からどんなトピックか全体のテーマをつかみ、そのあと必要と思われる文と単語へと的を絞って集中するほか、既知の情報や背景的知識を利用し内容の予測も行う (Gehring 2018:95)。

リスニングの際に学習者の脳内で働く、また働くべきプロセスは様々である。音声インプットに応じて、例えば学習者の言語知識²や世界の知識 (英: world knowledge³) が活用されている (Niewalda 2016:624)。学習者個人が持つ世界の知識という社会、国、人間関係などの一般的知識または背景情報や既知の情報を活用してリスニングに利用することができる (Buck 2001:18)。世界の知識を利用して、リスニングの場面や内容についての推測に役立てることが可能であるので、優れた学習者は、必ず積極的に自分の世界の知識を適用する (Flowerdew 2005:70)。学習者が自分の知識を利用して、予測・推測をたてることは、リスニング内容の理解に関する必要不可欠な過程である (Buck 2001:5)。もちろん、内容の理解のため、授業の指導者による異文化のポイント (ヒント) の指摘も場合によって必要である (Scarcell 1990:346)。

さらに Flowerdew は、リスニングの時に利用すべきストラテジー (テクニック) (英: Listening strategies) は、「bottom-up」と「top-down」のどちらを利用すべきかというよりは、その2つを合わせた「interactive」というリスニングストラテジーを身につけるべきだとも述べている (Flowerdew 2005:85)。

² Chomskyによると、言語に関する知識は二つがあり、その知識は言語学的な知識と言語学的ではない知識に分けられる。その外国語の文法を知らない学習者も、自分の母国語の知識を利用し外国語の理解に役立てることが可能なのである (Smith 1979)。

³ 英語の「world knowledge」の概念について [Buck (2001), p.18]

1.2 ドイツ語圏のリスニングストラテジー（リスニング目的）とは

上記の 1.1 において「top-down」、「bottom-up」と「interactive」というリスニングストラテジーを紹介した。ドイツ語圏の DaF（独：Deutsch als Fremdsprache = ドイツ語を外国語で教える教育）でも 3つのリスニングのストラテジー（独：Hörstrategie）があるが上記のストラテジーとは一致しない。Flowerdew の「interactive」等の 3つのストラテジーは、学習者の脳内で行う過程の分析によって設定されたストラテジーである。一方、ドイツ語圏のドイツ語教育における 3つのストラテジーは、脳内の過程の分析ではなく、リスニング設問の目的によって設定されている。この 3つのストラテジーは「場面の聴き取り」（独：globales Hören）、「ポイントの聴き取り」（独：selektives Hören）、「詳細の聴き取り」（独：detailliertes Hören）である (Brinitzer 2016:34)。リスニングの設問の種類によってストラテジーを使い分けて利用するため、学習者は 3つのストラテジーを意識して身につけなければならない。本論では、ドイツで構成、出版されたリスニング教科書を分析するため、ドイツ語圏の DaF 教育に従って以上のドイツ語圏のストラテジーを使用するものとする。「top-down」、「bottom-up」と「interactive」というリスニングストラテジーの名称をドイツ語圏のストラテジーの名称と区別するため、ドイツ語圏ではリスニングストラテジー（独：Hörstrategie）ではなくリスニング目的（独：Hörziel）とも呼ばれている (Gehring 2018:95) が、リスニングストラテジーという名称のほうがドイツ語圏では普及している。

では実際に学習者たちがどのストラテジーを使うかといえば、リスニングの設問の種類またはリスニングの目的次第となる。リスニングの目的はどんな場面なのかがわかればよいのか、その中の特定の情報を聴き取るのか、それとも、その他の詳細まで聴き取らなければならないのかの区別によってリスニングのストラテジーが違ってくる。

「場面の聴き取り」の場合では、学習者は聞く文全体がどんな場面、雰囲気、人間関係かを理解しなければならない。例えば聞いたテキストが駅のアナウンス、誕生日会への招待、それともデパートの店員と客との会話かどうかといった、どんな場面かを問う設問である (Brinitzer 2016:28)。

「ポイントの聴き取り」は外国語のリスニング教科書で一番多いパターンとなる。この場合には、学習者はテキストの中の一番大事な情報か、設問の答えになるポイントの情報だけを聴き取る必要がある (Brinitzer 2016:29)。

「詳細の聴き取り」の場合は、出てくる単語全てを理解しないとならない設問である。この場合、先の 2つのテクニックと比べると最も高い集中力が必要であり、書き取りに近い (Brinitzer 2016:30)。

実際の日常生活で 3つのストラテジー（聞く目的）の中で使用されるのが多いのは場面の聴き取りとポイントの聴き取りである。詳細の聴き取りの割合は少ない。リスニングの授業における設問もそれに応じる。つまり、学習者はリスニング授業で場面の聴き取りまたはポイントの聴き取りの設問をクリアしてもテキストの中の単語の理解度は 30~70% だけだが、一般的にはそれでよい。重要なのはテキスト内容の単語を全て理解することではなく、リスニングストラテジーを上手く使えるようになることなのである (Brinitzer

2016:33)。実際の日常的なシチュエーションでも学習者が上記のような技術を自動的に、上手く使えるようになることがリスニング授業の目的であり、故にリスニングのテキストとその設問は日常的なものであるべきなのである (Brinitzer 2016:34)。

1.3 リスニングの予習と復習

ドイツ語圏のドイツ語教育では、リスニング時の負担を軽減する事前準備・予習 (独: Vorentlastung) はリスニングの設問の解決のために必要不可欠で大変重要と考えられている。例えばテキストに載っている例題に応じて、異文化と世界の知識を活用したり、同様に語彙の設問に応じて単語の意味と発音を覚えたり、または表現やキーフレーズを覚える予習がある。リスニングテキストのテーマの内容についての推測と仮定を行う予想問題も便利にリスニングの予習となる (Brinitzer 2016:28)。

学習者が新しく学んだ表現と単語をより深く身につけるためにできることは、リスニング後に「聞く」以外の三つの技能「話す」「読む」「書く」で学ぶことである。それはリスニング後の復習にもなる (独: Nachbereitung)。リスニングのテキストの多くが日常的な会話を扱うので、会話の練習もできる。例えばリスニングのテーマが天気や天気予報だった場合に、リスニング後に学習者は天気に関する学習した表現と単語を利用して天気について会話の練習をすればよい (Brinitzer 2016:31)。もちろん、リスニングのテーマを書いたり、読んだりする練習問題と結びつけることもできる (Gehring 2018:97)。

1.4 リスニングテキストの種類

リスニングを対象としたテキストで最も多いのはダイアログである。歯医者予約や病院での診察、通行人に道を聞く、店員に商品の値段などを聞いて情報を得るパターンが頻出する。これらのリスニングのパターンで聞き手はダイアログの中で情報を聞く人と同じ立場になるため将来現実で似たようなシチュエーションでうまく実践するための練習となる (Brinitzer 2016:25)。

ほかのダイアログの種類としては対話とディスカッションがあり、これは複数の話し手が互いに情報や意見を伝え、それを聞き手がパズルのように組み合わせていかないといけないパターンである。その情報や意見を誰が言ったのか集中しないといけないという点で難易度も高い (Brinitzer 2016:25)。

もう一つよくあるリスニングテキストの種類はモノローグである。よくあるモノローグには例えば駅や空港のアナウンスがあり、他の種類のダイアログと比べると情報の密度が高く、より集中力が必要となる。一方モノローグはダイアログの中に話し手が何度も変わる部分がないので、比較的安易なところもある (Brinitzer 2016:26)。

1.5 教科書を対象にする分析カテゴリー表の構成

以上、概観したリスニングの特徴とストラテジー等の主要なポイントを考慮して、2つのドイツ語リスニング教科書を対象にした分析カテゴリー表の構成を行う。主に以下の3

つのカテゴリーを設定した：

- ① 聞く前の予習（例：語彙、表現やフレーズを準備する予習問題や内容についての仮定（推測）を行うこと）
- ② リスニング時の3つのストラテジー（場面の聴き取り、ポイントの聴き取り、詳細の聴き取りの練習）
- ③ リスニング後の復習（リスニング問題を通じて学んだ単語、表現やフレーズを他の3つの技能「話す」「書く」「読む」と結び付ける練習問題）

リスニングの事前準備・予習として留意しておきたいことは、まずリスニングの設問に出る語彙、表現やフレーズが予習問題を通じて紹介されているか、内容の推測を容易にするキーワードが示されているか、あるいは推測を積極的にさせているかという点である。

さらに3つのリスニングストラテジーに関する能力を身につけるリスニングの設問が教科書に現れるか、どの割合で出るか、学習者がリスニングの設問の種類に応じてどのようなストラテジーを用いれば設問の解答に成功すると想定されているかといったことも重要である。

さらに「話す」、「書く」と「読む」技能は、リスニングで学んだ範囲と関連があり学習者がそれをさらに深く身につけるための練習問題があるか、またはどの割合で3つの技能の問題がでるかといったことである。

2. 二つの教科書の分析と比較

以上の1.5で設定した分析のカテゴリーで、ドイツで出版された最新のドイツ語のリスニング教科書の二つを分析して比較する。以下では、Hueber 出版社の『*Zwischendurch mal ... Hören. Deutsch als Fremdsprache. Niveau A1-A2.*』を「Hueber 教科書」、Klett 出版社の『*Hören und Sprechen A1. Das Training.*』を「Klett 教科書」とする。

2.1 「Hueber 教科書」

2016年に出版された「Hueber 教科書」はA1～A2級（初級下～初級上）⁴の構成だが、分析はA1級（初級下）の範囲に限ることとする。そのA1級は9課あり、リスニングテキストは全て日常的なシチュエーションなので、学習者にとって役にたつ表現がよく出る。

⁴ ヨーロッパ言語共通参照枠（英：「Common European Framework of Reference of Languages」(CEFR)）によってヨーロッパ全体で外国語の学習者の習得状況を示す際に用いられるガイドライン（A1-A2（初級下上）、B1-B2（中級下上）、C1-C2（上級下上））。ヨーロッパ言語共通参照枠の目的は、ヨーロッパのすべての言語に適用できるような学習状況の評価や指導といったものの方法を提供することである。

（参照（独））：<https://www.europaeischer-referenzrahmen.de>

（参照（英））：<https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages/home>

- ① リスニングの前の予習の設問が教科書に適切に用意されている。例えば、レストランの場合では、会話に出る予定の料理と飲み物の語彙を身につける予習、天気についての場面の場合ではリスニングに出る予定の天気に関連したフレーズ（雨が降る）を天気のイラスト（雨や太陽のイラスト）と繋げて整理する予習がある（p.20）。病院への電話会話の場面では、リスニングに出るキーセンテンスを先に完成して覚える予習もある（p.30）。リスニングの内容に対する予測をたてさせるように基本的な予習が様々なバリエーションで用意されており、学習者はいろいろなチャレンジを通じてリスニングの本番の準備がしっかりとできる。しかし4つの課に予習問題が用意されていないことは欠点であると考えられる。
- ② リスニング時に学習者が設問の種類に応じて身につけるべき3つのリスニングストラテジーがすべて現れる。「場面を聞くストラテジー」に対応したテーマは3つ、「詳細に聞くストラテジー」のテーマは2つ、「ポイントを聞くストラテジー」のテーマは8つあるのでよいと言える。「場面を聞く」設問の場合では、例えば、学習者は役場の会話の中の雰囲気を感じ取って、窓口の役員または窓口の利用者がそれぞれ親切であるか不親切であるかといったことを問う、簡単で役に立つウォーミングアップの設問がある（p.14）。「詳細的に聞く」場合では学習者はコールセンターの会話の中の依頼に関

「Hueber 教科書」

リスニングの テーマ	リスニン グの前 予習問題	リスニング時			リスニングの後		
		リスニングタスクが求めた ストラテジー	書く	話す	読む		
「A1」級のテーマ（課）		場面 を聞く	ポイント を聞く	詳細 に聞く	書く	話す	読む
1 パーティでの 初対面			○		○	○	
2 役場での手続き (1)		○	○		○	○	○
3 役場での手続き (2)	△	○	○		○	○	
4 売買広告先への 電話	○		○			○	○
5 地域の天気	○			○	○	○	○
6 喫茶店での注文	○		○			○	
7 コールセンター への電話		○	○	○		○	
8 病院への電話	○		○		○	○	
9 駅の窓口			○		○	○	

○=ある △=ややある

する二つのセンテンスの単語をそのまま一つずつ書かないといけないという設問が設けられている (p.30)。

- ③ リスニング後の復習問題は各課に設けられており、リスニングの設問で学んだ語彙や表現をもっと深く「書く」・「話す」・「読む」技能の問題を通じて身につけることができるのはよい。「話す」技能の設問は最も多く各テーマで出願される。その中で「書く」と「話す」技能の設問のほうが「読む」技能の設問より多くなっている。例えば天気の場合は、天気情報を自分で設定し、リスニング前、またはリスニングの時に学んだ表現を使って相手と天気について話す会話パターンがある (p.20)。「書く」技能の場合では、役場窓口のテーマのリスニングの時に学んだ単語と表現を使って、疑問文に応じるものや、また答えに合う疑問文を書く練習問題がある (p.15)。「読む」技能の場合では駅の窓口のテーマでのリスニングの後に、ネットでドイツ鉄道の公式 HP で〇〇都市から〇〇都市への片道切符の値段はいくらかを問う設問もある (p.35)。

2.2 「Klett 教科書」

「Klett 教科書」は 2018 年に出版された。リスニングテーマは 14 課の構成で A1 級（初級下）となっている。すべてのテーマは日常的なシチュエーションなので、学習者は実践的な練習ができる。

- ① 各テーマに予習の設問があるのはよいと考えられる。例えば、趣味についてのテーマの場合では、学習者は予習問題として並んでいる趣味のイラストに合う表現（語句）を選択して整理する。次のステージの予習問題でその表現を使って各曜日の単語と合わせて趣味センテンスを一つずつ書いてリスニングの時に出る単語と表現を早めに身につけることで、リスニングがスムーズにできるような練習問題で構成されている (p.26)。
- ② 3つのリスニングストラテジーの中で、場面を聞くストラテジーは設問として現れない。それゆえ学習者はその3つではなく、2つのストラテジーしか身につけることができず、残りの1つは大きな欠点となる。そのほかの2つのストラテジーでは、ポイントを問う設問のほうが多くなっている。詳細的に聞く設問の例として、家賃をテーマにして連続で出てくる8つの異なる金額を一つずつ聞き取って書く問題がある (p.36)。ポイントを聞く設問を例にすると、スポーツのテーマでインタビューされる人の年齢、好きなスポーツ、週に何回そのスポーツをするかなどの質問に答えなければならない (p.50)。
- ③ 各テーマではリスニング後にそのほかの3つの技能の復習問題があり、学習者はリスニング問題で学んだ表現や語彙をより深く練習することができる。この教科書はリスニング問題を特に話す練習問題と繋げている。例として、初対面のリスニングテーマで学んだ表現と単語を利用し、自己紹介して話す練習問題がある (p.8)。「書く」技能では、例えば町をテーマにするリスニングで学んだ道を聞く方法と道案内の表現を使

って、短い会話を書く問題がある (p.13)。「読む」技能では、例えば仕事と職場をテーマにリスニングの表現を思い出し、並んでいるイラストに合う依頼文を一つずつ書く練習問題がある (p.40)。

「Klett 教科書」

リスニングの テーマ		リスニン グの前 予習問題	リスニング時			リスニングの後		
			リスニングタスクが求めた ストラテジー			他の3つの技能と 接続する復習問題		
「A1」級のテーマ (課)			場面 を聞く	ポイント を聞く	詳細 に聞く	書く	話す	読む
1	自己紹介	○		○		○	○	△
2	町で	○		○		○		
3	買い物	○		○		○		
4	駅で	○		○	○		○	△
5	レストランで	○		○		○	○	
6	暇の時間、趣味と 時刻	○		○		○	○	
7	病院で	○		○	○	○	○	○
8	お住まい	○		○	○		○	
9	仕事と職業	○		○		○	○	○
10	旅行と部屋の予約	○		○	○	○	○	
11	誕生日会やお祝い	○		○	○	○	○	
12	スポーツ	○		○		○	○	○
13	デパートで服を買 う	○		○		○	○	
14	週末に何をしたか	○		○		○	○	

○=ある △=ややある

3. おわりに

本論では、リスニングの特徴とポイントに従って分析枠を設定し、ドイツで出版された最新のドイツ語教科書2冊の分析を行った。それぞれの分析の結果を一覧表にし、その二つの一覧表を通じて分かりやすく比較も行った。比較の結果、リスニングの前の予習問題、リスニング時のストラテジーとリスニング後のほかの3つの技能とを繋げる練習問題に関して、2冊の教科書はDaFのドイツ語教育指導による条件(リスニング教育に関するポイント)を概ね果たしている一方で、改善すべき大きな二つの欠点もあると指摘した。「Hueber教科書」の場合、4つの課に予習問題が用意されていない点が問題となる。さらに「Klett

教科書」の場合、3つのリスニングストラテジーの中で、場面を聞くストラテジーはリスニングタスクとして設けられていない点を改善するべきである。

リスニングの前に、内容についての推測を中心とする予習問題（例えばテーマがわかれば、どの単語がでるかなど）は教科書に用意されていることだけではなく学習者に積極的に考えさせる予習問題も両方の教科書に必要である。

両方の教科書の優れた点は、リスニング後に学習者が新しく学んだ単語や表現を用いてそのほか技能（話す・書く・読む）の復習問題で行うことで、さらに知識を深く身につけることができることである。課によって、リスニング後の復習問題においては一つか二つの技能だけではなく、三つの技能がそれぞれ活用を求められている点は評価できる。

さらに、両方の教科書の課によってポイントを聞くストラテジーだけではなく、詳細的に聞くストラテジーを練習するタスクもあるが、「Hueber 教科書」では場面を聞くストラテジーを含めて三つのストラテジーをそれぞれの設問で一つの課内で練習できることが利点として挙げられる。しかし、それは一つの課のみのため、両方の教科書でそういった三つのストラテジーが求められるケースがより多くの課に設けてあればさらによい教科書になるだろう。

外国語教育において、リスニング能力を身につける指導は最重要課題の一つであり、これからもドイツで出版されるリスニング教科書の発展に注目し続ける必要がある。

本論で分析・比較の対象とした教科書

Békési, B.; Clalüna M.; Dallapiazza, R.-M.; u.a. (2016). *Zwischendurch mal ... Hören. Deutsch als Fremdsprache*. Niveau A1-A2. München: Hueber Verlag.

Sieber, Tanja (2018). *Hören und Sprechen A1. Das Training*. Stuttgart, Klett-Verlag.

参考文献

Brinitzer M.; Hantschel H.-J.; u.a. (2016). *DaF unterrichten. Basiswissen Didaktik. Deutsch als Fremd- und Zweitsprache*. Stuttgart: Klett-Verlag.

Brown, H. (1987). *Principles of Language Learning and Teaching*. New Jersey: Prentice-Hall.

Buck, G. (2001). *Assessing Listening*. Cambridge: Cambridge University Press.

Cook, V.; Newson M. (1996). *Chomsky's Universal Grammar. An Introduction*. Second edition. Oxford: Blackwell Publishers.

Dulay, H.; Burt, M.; Krashen, S. (1982). *Language Two*. New York: Oxford University Press.

Flowerdew J.; Miller, L. (2005). *Second Language Listening: Theory and Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.

Gehring, W. (2018). *Fremdsprache Deutsch unterrichten. Kompetenzorientierte Methodik für DaF und DaZ*. Bad Heilbrunn: Verlag Julius Klinkhardt.

Krashen, S.; Terrell, T. (1983). *The Natural Approach. Language Acquisition in the Classroom*.

Oxford: Pergamon Press.

- Niewalda, Katrin; Schmidt, Maria; Sakamoto, Shinichi (2016): „*Ergänzungsvorschläge für Hörverstehensübungen in deutschen Lehrwerken im universitären DaF-Unterricht in Japan.*“
In: Info DaF. Informationen Deutsch als Fremdsprache. Nr. 6, 43. Jahrgang, 624-647. [Online: http://www.daf.de/downloads/InfoDaF_2016_Heft_6.pdf].
- Phyllis, L.; Smalzer, W. (2014). *Listening and Notetaking Skills 2: Intermediate Listening Comprehension*. Boston: National Geographic Learning.
- Scarcell R.; Andersen, E.; Krashen, S. (1990). *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Newbury House Publishers.
- Smith, N.; Wilson, D. (1979). *Modern Linguistic: The Results of Chomsky's Revolution*. Bloomington: Indiana University Press.